

## 平成30年度1回 千葉市史跡保存整備委員会 加曽利貝塚調査研究部会 議事録

1 日 時 平成30年6月22日(金) 午後4時00分～午後5時30分

2 場 所 千葉市東京事務所 会議室

3 出席者 (委員)

谷口委員(副部会長)、岡本委員、設楽委員

(オブザーバー)

千葉県教育委員会文化財課 吉野主任上席文化財主事  
(事務局)

【文化財課】滝田担当課長、森本主査、須賀主任主事

【加曽利貝塚博物館】高梨館長

【埋蔵文化財調査センター】

西野所長、松田主任主事、菅谷主任嘱託研究員

4 議 題

報告

平成30年度 加曽利貝塚調査研究事業について

議題

平成30年度 発掘調査計画について

5 議事の概要

報告

平成30年度 加曽利貝塚調査研究事業について

事務局の報告について了承された。中長期的な研究事業をランドデザインの中にも示すよう意見があった。

議題

平成30年度 発掘調査計画について

事務局案について了承された。

土壌調査やDNA分析等、それぞれの研究者と早い段階で協力体制を築くよう意見があった。

貴重な発掘調査の機会のため、学生などが参加できる体制を構築するよう意見があった。

## 6 会議経過

### 【開会】

(事務局)

ただいまより、平成30年第1回千葉市史跡保存整備委員会加曽利貝塚調査研究部会を開催いたします。私、司会を務めさせていただきます須賀でございます。

この部会は市の情報公開条例により公開となっております。議事録は事務局が作成し、部会長の承認によって確定いたします。

なお、本日の会議から、臨時委員として東京大学の設楽博己教授にご就任いただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

高橋部会長は諸事情によりご欠席ですが、半数以上の3名の委員に出席いただいていることから、会議が成立していることをご報告申し上げます。

また、オブザーバーとして千葉県教育庁文化財課より吉野主任上席文化財主事に出席いただいております。

それでは議題に入る前に、今年度の最初の部会になりますので、委員の皆様をご紹介します。

千葉大学名誉教授 岡本 委員

國學院大学教授 谷口 副部会長

東京大学教授 設楽 委員

続いて、事務局の職員を紹介いたします。

～ 座席順で事務局職員を紹介 ～

それではこれより議事に移らせていただきます。ここからは、谷口副部会長に進行をお願いしたいと存じます。谷口副部会長、よろしくお願いいたします。

(谷口副部会長)

それは次第に従いまして、会議を進行します。

### 報告 平成30年度加曽利貝塚調査研究事業について

それでは事務局より、ご説明申し上げます。

〔事務局説明：資料により、説明。〕

(谷口副部会長)

ただ今の説明を受けまして、何かご意見ありますか。

(岡本委員)

去年から埋蔵文化財調査センターの中で加曽利貝塚の専属体制が一応出来ているけれども、これも仮の形に過ぎず、将来的にどうするのか事務局で考えて欲しい。情報発信や教育普及という側面は今まで加曽利貝塚博物館が担ってきており、調査研究の担当も博物館の中で一体化していくことはできませんか。将来の全体構想と関係するし、4月に開催した史跡保存整備委員会でも埋蔵文化財調査センターをどうするのかという課題が示されて

いる訳だから。史跡保存活用計画書の編集の時に設楽委員が強く言われたように、縄文文化と貝塚の性格の究明する研究センターを目指さなければならないという提言も史跡加曾利貝塚保存活用計画策定部会から出ているわけだから、いずれは仮の姿から目に見える形で体制を組んで、外からも良く分かるような形にした方が良いと思います。

(滝田担当課長)

現時点では完全に整理は出来ていないんですが、博物館の移転に合わせて移転場所を決めた後に、どういった機能を持たせるかという次の議論を進めていきたいと思います。遠く先の話でなく、ここ数年でどういう研究体制をとるというものです。

(岡本委員)

博物館ができるかできないかと関係なく、そういう構想は作っていくということですね。

(滝田担当課長)

そうですね。はい。

(岡本委員)

埋蔵文化財調査センターだって市内の開発に先立つ発掘調査などで忙しくなるし、加曾利貝塚博物館に体制を集約する方が、今はまだ整理作業を行うための場所もないけれど良いと思います。その体制が核となって、将来的に発展していってくれば良いと思います。

(滝田担当課長)

はい。

(設楽委員)

今回は平成30年度の調査に関する事で、この計画案で結構かと思うんですけど、次回は中長期の計画を示していただきたいと思います。

今までの経緯を遡ると、平成28年度に岡本委員を中心に史跡加曾利貝塚保存活用計画がまとまって冊子になったと。そこに盛りこまれた内容は、加曾利貝塚が特別史跡になることを睨んでのものだったのですが、加曾利貝塚から全国へ情報発信していこうということで、縄文時代の貝塚研究のセンター的な機能を博物館に持たせていくというのがひとつの提言だったわけです。

確か体制づくりについて史跡保存活用計画策定部会の委員の皆さんから強い要望が出て、その部分は具体的に計画へ盛り込めなかったんですけど、いずれそれはしっかりと制度設計をしていくということでまとまっていたかと思うんです。今、岡本委員が言われたとおり、将来的な体制やロードマップを、現在策定を進めているグランドデザインの中で示していただきたいと思います。平成30年2月に開催された前回の調査研究部会の議事録を読ませていただいて、やはり中長期計画が知りたいです。そこをやっていかないと、単年度ごとに場当たりの調査になってしまうと思うんですよ。ですから、5年くらいの中長期計画と20年くらいの中長期計画を示していただきたいと思います。

この部会での検討の母体となる中長期計画がしっかりとデザインが出来ていないと、いくら会議を開いてもダメだと思うんですよね。ですので、この部会がどこまでその内容を

詰めていけるのか、提言なりができるのかということと、そして何回年に開かれてどのあたりでそういったグランドデザインを示していただけるのかをお考えいただければと思います。

(滝田担当課長)

はい。

(谷口副部長)

ほかにご意見ないようですので、次第に従い進行します。

### 議題 平成30年度加曾利貝塚発掘調査について

それでは事務局より、ご説明をお願いします。

〔事務局説明：資料により、説明。〕

(谷口副部長)

ただ今の説明を受けまして、何かご質問等ありますか。

(岡本委員)

この発掘調査方針は文化庁とも協議していますか。去年は最初の発掘だったので慎重にやらざるを得ない側面もあったと思いますが、全体の区画をどういう計画で掘るのか良く考えた上で発掘を進める必要があると思います。

特別史跡なのでですから、純然たる学術発掘の側面だけでなく、ある程度市民にもわかるような調査成果を提示できるようにしないと。昨年度の現地説明会のように半分だけ掘った竪穴住居跡を見せられたって、普通の人は何かわからない。

今年度はどこまでやって、変な言い方ですが、どこを目玉にして見せるのかということをもう少し考えないといけない。慎重にやればいくらでも慎重にできるけれど、時間ばかりかかって成果をわかりやすく市民に示すことはできない。例えば、何年計画とか、全体をどういう計画で掘ろうとしているのか。

(松田主任主事)

一応、来年度までです。今年度は昨年度半分しか掘らなかった85号住居址、これがさすがに半円ではわかりませんから、これを住居だと分かる状態まで見せるということで85号住居址の掘削が最優先。ただ、住居址というのは全部丸々掘りたいところですけど、そうしてしまいますと、将来的に覆土とか再検証できないので北西部分は4分の1くらい一部残しますが、それ以外は掘って炉とか出てくると思いますので、これをまず一つの市民にわかる目玉と考えています。

それからもう1つは未報告遺構5ですね。これが非常に大きな遺構で、住居かどうかの確認が必要ですが、ここのところに、非常に重要なものがあるとするれば、それがどういうものかというのをある程度示せるようなところまで行って、そしてその次に大型住居をその次の年度に掘るといようなことを考えていまして、この2つの遺構がメインです。

あと、全体において集落であればどのような遺構配置になってくるのかを知る上で、全体的な遺構確認に応えたいと思っていますけれど、大体そういうような予定です。

ただ、未報告遺構5というのは、非常に規模も大きくて深いです。掘るのに時間もかかると思うんです。ですからこれをどこまで掘れるかというのは、来年度さらに長い期間調査するにしても、なかなか容易なことではありませんので、今年度調査した結果をふまえて、その次の年度に向けて調査体制をしっかりと考えてやっていきたいと思います。

(岡本委員)

そのあたりはよく考えて調査を進めてください。決められた期限内でできる範囲は決まっているわけだから、その中でどういうことをするのか。それから未報告遺構5ですが、こんなに大きい住居跡だとしたら、これは特別史跡加曽利貝塚の重要な遺構になります。これは住居跡かどうか確認して終わらせないと。調査期間も4か月間に延長した訳だし、昨年度の経験を活かしてもう少し調査を進め、是非とも明らかにして欲しい。

(西野所長)

見通しとして3年なのですが、遺構がどれだけあるかもまだ掘めていないところがあります。

(岡本委員)

今回の調査範囲内の遺構をどこまで掘るか決めておかないと。加曽利貝塚はここだけじゃないのだから、ここに集中していたら他のことができなくなってしまう。

(西野所長)

一方で加曽利貝塚の整備に係る調査も来年から入ってきそうです。状況によってはそれがメインとなる可能性もあります。

(岡本委員)

千葉市が力を入れて発掘調査をやっているけど、文化庁だっていつまでも調査費用の負担に付き合ってくれるかわからない。だからその辺も含めて調査体制を整えていく必要がある。加曽利貝塚の全体の構造が明らかになるよう、計画的に発掘調査をしていかなければならない。

先ほど設楽委員が言った通り、中長期計画を示すとともに、この調査範囲ばかりに集中するのではなく、今回の調査範囲は3年なら3年でできることを仕上げるということをやっていないと、特別史跡を発掘している意味がなくなってしまう。

(谷口副部長)

確認ですが、未報告遺構5というのは、今回の調査範囲では目玉になるような遺構だと思うんですけど、もし来年度までで掘りきれなかった場合は、調査期間を延長して取り組む方針ですか。

(松田主任主事)

調査期間は延長というのは12月とか翌年度でしょうか。

(谷口副部長)

そうですね、平成32年度まで延長するとか。

(松田主任主事)

それはこちらでも決めきれていません。今年度、ある程度状況を把握したうえで、今年度中には提示したいと思います。

(西野所長)

提示というかご相談ですね。

(森本主査)

次回の部会を、未報告遺構5の調査方針について相談できるくらいの時期で行いたいと考えております。

(岡本委員)

予算の関係もあるから時期を見計らって。金の切れ目が縁の切れ目。

(設楽委員)

史跡整備に係る調査は来年度ですか。

(森本主査)

そうです。今、ランドデザインの策定を進めていて、今後の史跡整備について市の方針決定がなされれば、整備の基本設計に入っていくこととなります。そうすると、国庫補助事業として整備事業を進める場合、基本設計と併せて整備に係る発掘調査を実施する必要があります。管理用道路などの整備に伴う確認調査が必要で、それが来年度に入ってくる可能性があります。

(設楽委員)

そうすると、今の発掘調査体制で大丈夫ですか。

(森本主査)

現状では、今年度も発掘調査担当者が一年間を通じて専属で加曾利貝塚の調査研究に従事できている状況ではありません。今後、調査体制をきちんと整えていく必要があります。

(岡本委員)

専門職員も増えているわけだから、うまくやりくりして加曾利貝塚博物館とも連携しながら調査研究を進めていく体制を是非整えて欲しい。今すぐ出来ないにしてもそういうものを目指していくことは将来につながっていく訳だから、大切です。

未確認遺構5は本当に住居跡だったら、直径何メートルあるのですか。

(菅谷研究員)

直径14～15メートルです。

(岡本委員)

それは大変大きいですね。

(西野所長)

北側だと、深さも2メートル近くあります。

(設楽委員)

宮内井戸作遺跡の大型住居跡は直径何メートルくらいでしょうか。

(菅谷研究員)

宮内井戸作遺跡は18メートルくらい。あと、概要しか報告されていませんが、佐倉市の吉見台遺跡は20メートルを超えていて、全周壁が2メートル近い。排土の土量だけで10トントラック数十台だという風に聞いています。私が知る限りあれが一番大きいかなと思います。千葉県内では。

(岡本委員)

調査区内を通る電源ケーブルを今年度の調査に着手する前に調査区外に迂回することはできませんか。このままの状態です調査するのですか。来年度も同様ですか。

(森本主査)

今年度はまず、調査区内で電源ケーブルを露出させる状態で調査を行いたいと思います。この電源ケーブルは南貝塚の野外観覧施設と復元集落へ電源を供給しています。今後の史跡整備とも関係しますのでその整備の設計を踏まえた改修が必要になってきます。

(滝田担当課長)

当面切り回し工事をして迂回させようという話もあったのですが、まずはブランとした状況でも危なくないということでしたので。

(岡本委員)

全体が出てきてぶらんとしたままじゃ・・・

(森本主査)

本格的に未報告遺構5を発掘する際は、電源ケーブルの移設を考えていく必要があります。今年度は電源ケーブルを露出させて、埋設状況を確認したいと思います。

(設楽委員)

そうするとこの電源ケーブルが埋まっているところがトレンチみたいになるということですか。

(森本主査)

溝を掘って埋設しているのではなく、遺構確認面より高い位置に電源ケーブルを設置し、盛土しているため、トレンチのようにはなりません。

(谷口副部会長)

むしろごろごろ転がっているということですか。

(森本主査)

そうです。蛇腹の保護管の中に電源ケーブルが入っており、それが今年度の調査時には遺構確認面の上に露出している状態になります。

(谷口副部会長)

資料3-1でご説明あったように、黒色土の包含層とか黄褐色土の包含層とか、土壌の形成過程の解明が求められているということなのですが、これをどういう計画で具体的に

には臨んでいけますか。

(松田主任主事)

今回土壌サンプルをとって簡単にふるって見たところ、動物質のものや植物質のものがあるということでしたが、今のところ去年関わっていただいた関東第四紀研究会に来ていただいたのは主に火山灰をやっている人で、植物の専門家ではなかった訳です。それから土壌形成ですが、土壌の専門家に見ていただく必要があるから、サンプルを取る時点で関わっていただいた方がいいと思っていて、どういう方に来ていただいた方がいいのかは検討している最中です。

(西野所長)

関東第四紀研究会の方に入ってもらっているので、あまり変な風になるといけないので、近藤さんという市原の職員の方で今年退職された方にいつも橋渡しをしてくださっているので相談することになっています。どの方がいいかも含めて相談しようと思っています。

(谷口副部長)

前回にも発言したかもしれませんが、寺野東遺跡とか流山市の三輪野山遺跡とか、晩期の段階で集落の中心部分を意図的に掘削するような行為がありますよね。ああいう事例を考えると、加曽利貝塚の場合も中央部分でそういう行為があるのかなのかという点を検討していかないと、なかなか今回の調査地点だけの局地的な部分での土壌分析だけでは遺跡全体の形成過程の中での土壌の移動とか、再堆積とかを調べられないんじゃないかと思いますが、それはどういう計画で臨んでいけますか。

(松田主任主事)

今回はこの部分を調査しているだけでありますけど、少し南の方も掘りますので、土の堆積等で違った状況もでてくるかもしれません。ここの中ではそのようなことを考えています。あと、全体的にはもう少し長期的のスパンで、どこを掘ったらどういうのがわかるかという視点で、南貝塚のどこを掘ったらそういう形成過程がわかってくるのかということの中期的な計画の中で組み込みながらやっていくことになるかと思っています。そこまでは検討しきれていないのですが。

(西野所長)

可能性としてですけども、南側を延長して、この大型住居が立ち上がってれば、その先はその部分を見られると思うんですよ。もしほかの遺構がかかっていればダメなんですけど、なければこの部分の延長したところすでにそこに係っていると思うんです。真ん中の。ギリギリでしょうけど。

(菅谷研究員)

昔の図面の記載では、そこまでではないです。もっと南。

(岡本委員)

旧トレンチを利用して、中央部分の窪地の状況を横断的に調査すれば、遺跡全体の形成過程が把握できるのでは。

(西野所長)

旧トレンチを延ばせばできますよね。

(岡本委員)

今回の調査範囲での調査を終えた後でも、現時点で遺跡全体の形成過程をどのように考えるのか、旧トレンチを横断的に調査する必要があるのでは。そこで、新しい視点が提示できるか。

(菅谷研究員)

今すぐということではないんですけど、昨年開けてみまして、旧トレンチの位置が従来推定されている位置よりも実際の位置がずれているということがはっきりしました。で、それと55年前の調査日志を見る限り、調査中にトレンチが直交していないということはすでにわかっておりますので、ということは少なくとも各トレンチの交点を押さえない限り、全体の昔の調査の地点というのを把握することはおそらく無理であろうと思います。ですからトレンチをわかっているところを延長していくというのもありだと思えますし、一方で昨年の調査地点はトレンチの交点にあたるだろうというところを何とか確実に捕まえようということで25メートル四方を設定したわけですけど、同じような形で何か所かのトレンチの交点というのを、長期計画の中に組み入れていって、そうしますと例えば1トレンチと2トレンチが南貝塚の1番真ん中で交点になるように設定されているはずですので、それを探す過程の中で例えばいわゆる中央窪地の土壌がどうなっていくのかという調査は可能になると思いますし、ただそういったことをどういうように今後の整備計画に組み入れていくかということと関わってくるかと思えます。

(岡本委員)

史跡整備は北貝塚と南貝塚のどちらから始めますか。

(森本主査)

まず、復元集落に向かう園路から整備を進める予定です。南貝塚の中央窪地を短期的整備の中で整備することは考えていません。

(岡本委員)

平成31年度までの3年間で今回の調査区を掘って、次の段階をどういう風に進めていくのか、整備との関わりもあるわけですから、色々な課題を整理した上で、計画的に調査を行う必要があります。設楽委員のおっしゃったとおり、中長期的な計画を含めて、この部会で提示していただきたいと思えます。

(谷口副部長)

地中レーダー探査を折角やっているわけですから、その成果を調査計画へ意識的に反映させた方が良いと思えます。

(岡本委員)

今年もやるのですか。

(森本主査)

はい。

(設楽委員)

85号住居跡で、魚などの動物遺体や炭化した植物遺体が出土しているということですが、未報告遺構5ではいかがですか。

(菅谷研究員)

床面からわずかに浮いた状態で貝層のブロックがあることは半世紀前に記録されています。おそらく安行3b式であろうと。貝層から直接資料はとってないと思いますけど、それを検出した状況から、おそらく安行3b式の時期の貝層だろうというふうな記載がされています。ですから非常に珍しい時期の貝層になりますので、それについては期待をしています。

(設楽委員)

昨年度、土壌については、関東第四紀研究会の方が来て直接サンプルを採取されているというお話でしたが、他にも貝類をはじめとした動物遺体や植物遺体など色々なものが出土してきます。総括報告書の時に色々な研究者にお世話になって分析されているわけですから、先ほどどういう方にとというのは考え中だと言っておられましたが、できるだけ早く調整して現場に来ていただいて、ディスカッションしていただいた方が良いと思います。

試料のサンプリングの段階から、一緒に関わっていただくと全然違いますので、その辺を早目に考えて手配していただく方が良いと思います。

炭化物で年代測定を行う予定はありますか。

(松田主任主事)

85号住居跡の覆土の一番下の方、床直のところで非常に黒い土がありますので、そういうところでどういう炭化物が入っているか、非常に興味深く思っています。そういうことをやりながら考えていきたいと思います。

(岡本委員)

未報告遺構5の時期はわかりますか。

(菅谷研究員)

以前の調査日誌の所見はいずれも安行3bあるいは姥山2の包含層がロームの上にある、つまり床面の一番上に乗っかっている土だと解釈できるんですけど、その土は安行3b式あるいは人によっては姥山式の包含層であるとそれぞれの各トレンチで所見がありまして。

(岡本委員)

では、その時期であるというのは間違いありませんか。

(菅谷研究員)

まず間違いありません。

(岡本委員)

85号住居跡と同じ時期と考えて良いでしょうか。

(菅谷研究員)

ほぼと言わせていただきます。最後の資料は、昨年度出土した土器を大雑把にすぐ作れる形で作ったものです。上半分の1番から7番というのは、IK2というのは完全に住居址だと確定しましたら85号住居跡としてやりますけど、現状まだ調査中の間はIK2という形でやらせていただきます。

こちらの方で出ているものです。特にこの中で1・2・3は安行3bというよりも安行3aの新しい部分と評価する人の方が現状は多いと思いますけど、下の4・5・6・7が入ってきていて、5・6は大洞cで7はおそらく滋賀里の2に相当する土器として考えています。これは一括性がいいんだとすると、結構広域編年を微調整しないといけないことになるかもしれません。で、下の8・9は住居址の周りの黒色包含層の中から出土したもので目立つものを2つほど実測図に落としたものですが、8は泉先生が実物を見られまして、滋賀里2に相当する物であると明言されました。本場の滋賀里2ではないということです。おそらく東海地方西部あたりかと。いずれにせよ搬入品であることは間違いない。9は地場の姥山2式になります。10は別添資料3の北西隅に細長いトレンチが形だけ入っていますけれども、こちらが貝層中に見えた褐色土の広がりに対して入れましたトレンチです。この褐色土のかなり上の部分から出てきましたのが10番の土器でして、こちらについての安行3bとって大方が納得して下さるだろうと思います。ただ、こちらについては下に下げていきますと、どんどん色調が濃くなっていきまして、下の方は加曽利B3でさらに直径1メートル弱のブロック状の貝層がボコリボコリと並ぶような状況になっておりました。これについてはトレンチの拡張をしないとこれ以上調査できないので少なくとも今年はよほどのことが無い限り手は付けられないことになるかと思えます。

(岡本委員)

北西部分を深掘りするとかでしょうか。

(菅谷研究員)

そうです。昨年調査の中でいいますと、こちらに掲載したものが示すような時期の集落の1部であるということと、土器の出方についてもかなり場合によっては専門家の間では話題を呼んでしまう可能性があるということだけお伝えしたいと思ひまして資料を作成いたしました。

(設楽委員)

資料の7番と8番は滋賀里II式ですけど、かつては滋賀里II式は安行3b式並行と言われていたけど、今は安行3a式並行とする意見の方が多いです。秋篠遺跡だったと思いますが、岡田憲一さんは、安行3a式の新しいところと滋賀里II式が共伴していると捉えています。むしろ滋賀里I式を後期とする考えも今は多いので、7・8番は1～3番の土器に伴うと見た方が良いのではないのでしょうか。

(菅谷研究員)

問題は1・2・3については実は1に関しては3a式の新しい所というふうに評価する人

の方が大部分。ただ、5・6は同じ層から出てきています。で、4の方がレベル的には下です。

(岡本委員)

85号住居跡は、まだ掘るんだから、追加資料が出てくるでしょう。

(谷口副部長)

この滋賀里式の鉢形土器は結構広がっているんですよ。

(設楽委員)

東北地方まで広がっていますね。もうひとつ、85号住居跡の脇にある人骨は手を付けないのですか。

(松田主任主事)

今年度は85号住居跡を掘るのに時間がかかりますから、遺構確認ということでやれる範囲でやってみまして、そこで遺構確認した段階でここを掘るかをその状況と来年度の目的を設定した上で実施することになると思います。今年度は確認のみです。

(岡本委員)

遺構確認はどれくらいの程度まで行うのか。

(松田主任主事)

遺構で土坑とかがあるかという確認です。

(設楽委員)

今は頭の部分だけ露出しているのですか。

(菅谷研究員)

頭骨です。

(岡本委員)

現地に残っているのですか？

(菅谷研究員)

残っています。55年前に取り上げずにそのまま埋め戻した状態でした。

(岡本委員)

余力があれば、調査したほうが良いのでは。文化庁と十分に協議しておく必要があるとは思いますが。

(菅谷研究員)

調査するとなれば85号住居跡の北側の壁は壊さないと調査できません。

(松田主任主事)

大体85号住居跡の壁高が、60センチ。その人骨が一番下のあたりにあたります。

(菅谷研究員)

レベル的には床面にほぼ近いレベルです。ですから昔の調査では85号住居跡に伴う人骨という所見もあって。晩期の人骨だとされていまして。が、昨年の調査では85号住居跡の北側の壁の立ち上がりがその手前で終わっていて、おそらくこの人骨の墓壙を85号

住居跡の壁が切っているという状態だと思います。

(岡本委員)

85号住居跡の壁面では土坑の掘り込みは見えないのですか。

(菅谷研究員)

一応通った断面では、私が引いた断面ではそうになっています。

(松田主任主事)

ただここについてはまだ複数遺構がある可能性もありますので、すぐにというわけにはいかないのです。

(設楽委員)

仮に人骨を取上げるのであれば頭骨だけってわけにはいきませんし、このまま取り上げずに残すというのであれば、果たして人骨にとって良いのかですよね。その辺は人骨の専門家に聞いてみないと。

(菅谷研究員)

昨年度は頭骨自体が半世紀前に露出されて埋め戻されているので、昨年トレンチを調査する中でもう1度出しちゃったものですから、一応昨年度はその上に土をかぶせまして、さらに土をかぶせた上から石膏を面的に流して一応養生した上での埋戻しをしています。それが長期的に見てどういう風に考えるのがいいか、人骨の専門家と考えなければいけないですけど。

(設楽委員)

DNA分析をやるとなったら、水にすごく弱いですから人骨に水が浸透して洗われちゃったらDNAを抽出できないですし。

(菅谷研究員)

昔の調査の所見では頭骨だけ単独という所見だったんですけど、おそらく体が頭骨の向きを考えるとおそらく東側に向かって体があると見た方が自然に見えるかと思います。そこはもっと掘らないと分からないけれども。

(岡本委員)

人骨を埋葬した土坑の輪郭はわかりますか。

(菅谷研究員)

土坑の輪郭を確認するためには、住居の外側をもう少し削らないといけないですが、すぐ際に貝層が迫っています。住居と貝層の隙間が墓壇になるかもしれませんけど、ただその部分を精査するとなると貝層に手をつけるかという判断も絡んできますのでどうしましょうかというところです。

(谷口副部長)

他にご意見等はよろしいでしょうか。

それでは本日出ました意見を反映させて、今年度の発掘調査は事務局案通りに実施するというところでよろしいでしょうか。

また、中長期的な調査計画と組織体制について多くのご意見が出ましたので、事務局で検討していただき、次回以降の部会の議題で上げたいと思います。

(各委員)

異議なし。

(設楽委員)

すみません、この発掘調査に関してですが、大学院生クラスを調査に参加させていただくことはできないでしょうか。

(松田主任主事)

昨年度も院生に来てもらいましたが、調査補助員は雇いますが、その中に学生枠を作って、市で直接学生を雇うことはできませんけど、調査補助員の中に入れていただくことはやっています。今年もそういった希望者の方は市へ言っていただければと思います。何十人というのは難しいですが。

(設楽委員)

大学院生で縄文社会の複雑化を研究したいという学生がいます。

(谷口副部長)

アルバイトではなく、調査員などの立場として市で雇用することはできませんか。

(松田主任主事)

今のところ、市で直接雇用しているのは整理作業員の方です。

(設楽委員)

発掘調査への学生の参加についても、この部会で取り上げられたら良いと思います。将来の博物館機能として一つは研究、もう一つは教育を盛り込んでいるのですよね。ですから今、谷口委員がおっしゃったとおり、アルバイトというよりは調査研究をできればと思います。

(岡本委員)

追々、縄文時代を研究したいという学生が発掘調査に参加できる体制ができれば良いと思います。雇用の問題もあると思いますが。

(滝田担当課長)

今年は業者委託をする経費で予算化を図っておりまして、ただ市長も、より学生が参加しやすい仕組みづくりをつくるようにと申ししておりまして、今年が発掘調査の経過を見守りながら、来年度継続的に調査する中で直接雇用するような仕組みで予算化することを検討していきたいと思います。

(設楽委員)

最近、学生が発掘調査に参加する機会がめっきり少なくなっています。私も荒海貝塚を調査した際、都内の学生をはじめ、全国から研究者が集まりましたが、またとない貴重な機会でした。そういう機会をこの加曽利貝塚でつくっていくのは、縄文時代の貝塚研究センターを目指す上で大事なことだと思います。

(岡本委員)

昔は早稲田・慶應・明治をはじめ、様々な大学が加曽利貝塚に集まって発掘調査を行っていた伝統があるのだから、そういった形をぜひ考えていただきたい。

(森本主査)

次回の部会の開催日程についてですが、未報告遺構5の調査方針についてご審議いただきたく、現地で遺構確認ができるタイミングでやりたいと思います。

(菅谷研究員)

昔のトレンチを掘りあがったくらいのタイミングでお願いしたいと思います。

(森本主査)

10月から11月の開催で先生方のご都合はいかがでしょう。

(各委員)

異議なし。

(森本主査)

具体的な日程については、内部で検討して、ご連絡します。次回の部会では、中長期計画についても説明したいと思います。

(谷口副部長)

オブザーバーとして千葉県の吉野さんからいかがですか。

(吉野)

中長期計画を示す必要があると設楽委員からお話がありましたが、史跡整備についても、短期的整備は今後、基本設計に入っていく一方で、長期的整備はランドデザインでも大ざっぱな絵を示す程度ですので、今後議論していく必要があると思いました。その中で今回の調査範囲の成果を史跡整備に反映させるのかなども考えていかなければならなくなっていくと思います。非常に忙しいことになるとは思いますが、事務局の皆様も頑張ってください。

(谷口副部長)

それでは、これを持ちまして本日の議事を終了します。進行を事務局へお返しいたします。

(事務局)

委員の皆様、長時間にわたりご審議いただきありがとうございます。以上を持ちまして、平成30年度第1回千葉市史跡保存委員会加曽利貝塚調査研究部会を閉会いたします。

——了——